

熊谷徹著「ドイツは過去とどう向き合ってきたか」高文研 2007年4月1日刊を読む

なぜブランド首相は追悼碑の前でひざまずいたのか

1. (1)ドイツの東隣にあるポーランドは、戦争で最も大きな被害を受けた国の一つである。ナチスは1939年のポーランド侵攻で、第二次世界大戦の火蓋を切り、ソ連とともに同国を東西に分割し、地図の上から消した。
 - (2)当時のポーランド国民3600万人のうち、約17%にあたる600万人が死亡し、ユダヤ人の85%が殺害されている。知識階級、富裕層に属するポーランド人は強制収容所に送られた。
 - (3)一方、1945年に米英ソの連合国が、ヤルタ会談、ポツダム会談でポーランドの西部国境をオーデル・ナイセ川に変更することを決定し、ドイツ帝国の一部だったシレジア地方はポーランド領となった。この結果多数のドイツ市民が、住み慣れた土地から追放されて、財産を失ったり、逃避行の途中で死亡したりした。
 - (4)このため、戦後も両国の市民の間では、憎しみの感情が強かったが、1969年に西ドイツ首相に就任したヴィリー・ブランドは、東欧諸国との間で緊張緩和をめざす「東方政策」を実行に移した。西ドイツは1970年にポーランドとの間でワルシャワ条約に調印し、戦争を放棄することと国境線に変更を加えないことを確認した。
 - (5)1970年にブランド首相は、ワルシャワ・ゲッソーの記念碑を訪れた。この場所はポーランドの歴史の中で、特別な意味を持っている。1944年にワルシャワのユダヤ人とポーランド人は、ナチスに対して武装蜂起を行ったが鎮圧された。ワルシャワはドイツ軍の報復でほぼ完全に破壊された。この記念碑は、犠牲となった市民を追悼するために作られたものである。ブランド首相は記念碑に献花した後、突然ひざまずいた。西ドイツの首相がユダヤ人を追悼する碑の前で膝を折った映像は全世界をかけめぐり、謝罪の気持ちを全身で表現する「新しいドイツ人」の姿を、被害者に対して印象づけた。
 - (6)私は1989年6月6日に、ボンの執務室でブランド元首相に過去との対決の意味についてインタビューした。彼の言葉には、歴史を心に刻むことを国是とするドイツ政府の態度がはっきりと表われている。
2. (1)熊谷：碑の前でひざまずいた時に、何を考えていましたか。
ブランド：私は最初からひざまずこうと予定していたわけではありません。記念碑に向かう時に、「単に花輪を捧げるだけでは形式的すぎる。何か他に良い表現方法はないものか」と考えをめぐらせていました。
そして碑の前に立った時に、こう思いました。
〈私は、ドイツ人が何百万人ものユダヤ人、ポーランド人を殺した惨劇に、直接は加わらなかった。しかし惨劇を引き起こしたドイツ人のために、自分も責任の一端を負うべきだ〉
私はこの気持ちを、ひざまずくことで表現したのです。

(2)熊谷：「過去」と対決することはなぜ重要なのですか。

ブランド：2つの理由があります。

第1の理由は、ナチス時代の恐るべき暴力支配について、「なぜこのようなことが起きたのか」「悲惨な事態が将来繰り返されるのを防ぐにはどうすれば良いのか」を、若い人々に説明することです。若者たちは、歴史と無関係ではありません。彼らも歴史の大きな流れの中に生きているのです。従って、過去に起きたことが気分を重くするようなものであっても、それを伝えることは重要なのです。

第2の理由は、ドイツが周辺諸国に大きな被害をもたらしたことです。従って、今後のドイツの政策が国益だけでなく、道徳をも重視することをはっきり示す必要があったのです。これは人間関係についても言えることですが、自分のことばかり考えずに、他の国のことも考えるという姿勢を、周辺諸国に対して示していくということです。

(3)熊谷：過去と対決する努力は永遠に続くのですか。

ブランド：私は自国の歴史について、批判的に取り組めば取り組むほど、周辺諸国との間に深い信頼関係を築くことができると思います。たとえばドイツとフランスの関係は対立と戦争の歴史でした。しかし今や両国の関係は、若者たちが「ドイツとフランスの間で戦争があったなんて信じられない」と考えるほどの状態に達しています。

同時に私は、過去の重荷を必要以上に若い世代に背負わせることには反対です。ドイツは、悪人に政治を任せただけの場合に、悲惨な事態が起きることを心に刻む作業については、かなりの成果をあげていると思います。私自身、周辺諸国の人々が我々に対して、過去について余りにも批判的な態度を取る場合にはこう言います。

「我々の過去を批判的にしか捉えないという態度は、いつかはやめてください」。

(4)熊谷：過去の問題に無関心な若者にはどう対処するべきでしょうか。

ブランド：若者たちが過去のことについて無関心になるのは当然のことです。彼らが、前の世代の犯罪について、重荷を背負わされることを拒否するのは、ごく自然なことです。若者たちには、父親や祖父がしたことについて責任はありません。しかし彼らは同時に、自国の歴史の流れから外へ出ることはできないということも知るべきです。そして若者は、ドイツの歴史の美しい部分だけでなく、暗い部分についても勉強しなくてはならないのです。

それは、他の国の人々が、我々ドイツ人を厳しく見る理由を知るためです。そしてドイツ人は、過去の問題から目をそむけるのではなく、たとえ不快で困難なものであっても、歴史を自分自身につきつけていかななくてはならないのです。

P20 ~ 23

[コメント]

NHK 記者を経てドイツ・ミュンヘンに在住、過去との対決、統一後のドイツの変化、欧州の政治・経済統合、安全保障、欧州経済危機下のドイツ経済を中心に取材を続ける熊谷氏からの日本国民へのメッセージ。歴史問題を国家のリスクとしないためのドイツの取り組みを紹介したもの。参考になる。